

福竜丸だより

— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521)8494

紀の国と第五福竜丸

— 船を造り守った人びと —

児童文学者 徳田純宏

今日お話ししますのは、私が創作したのではなくて、十三人の方からうかがったものを、構成し、つないだものです。

古座川の中州で

私がこの第五福竜丸と、どうかかわっていったかといいますが、他の取材で古座町に行きまして、その古座町に御船祭という七月十四、十五日にお祭りがあられるんですけど、そのお祭りに使う船を取材に行つてその話を聞いていますと御船祭に使う船を作っていた人が、南藤藤夫さんだったのです。そして、南藤藤夫さんという話を聞いていたら、実は私が第五福竜丸を設計して、それを作ったんですよと、一言だけ言ってくれたんです。

のすごく嫌うんです。ですから、私自身としましては、それ以上の話はできませんと言うことで、それから二回ほど取材に行つたんですけど、話を聞けずに終わりました。そして全部で七、八回古座に行きましてやっと今回お話しできるような話を聞けたわけなんです。第五福竜丸は、遠洋マグロ漁船と一般的にはいわれているんですけど、作られた時は、カツオ・マグロ漁船であつたわけなんです。一九四七年にこの古座町で一隻の船が進水するわけですけど、それがカツオ・マグロ漁船第七事代丸で、トン数は一四〇トンです。ここでカツオというのと、一四〇トンというのを注目していただきたいんです。

この船が作られましたのは、古座の町の中を流れています古座川というそれほど広い川ではないんですが、中州が非常に広いんです。この中州を古座造船所が借りうけて、船を作っていたんです。その中州の当時の広さは、二五〇トンの船を四隻一度に作れる位の広さであつたわけですから、かなりの広さの州であつたということが想像されます。

いですが、エンジンは引き上げずに、現在でも水の中につかっているわけです。

第五福竜丸の材料のほとんどがこの松の木を使っているわけですが、そして、ずうっとめぐってきて、一九六八年の七月二日にまたエンジンだけですが、この七里御浜のすぐ材料のとれた所にもどってきているんです。こういう船の運命を見ていきますと、非常に人間の力では及ばない所で働いている力とかを感じます。

三十六年ぶりの再会

さて、和歌山県の上秋津中学校の中平先生という先生が、地元で作られた第五福竜丸を是非とも子供たちに社会の教育の一環として見せてあげたいと、第五福竜丸展示館を修学旅行のコースの中に入れてください。どうして入れたかといいますが、もちろんそういう形で平和というものを社会の教育の中で考えたいという気持ちが一ポイントですね、もうひとつは、中平先生のお父さんが太地で違う船なんです。太地から第五福竜丸とのかわり合いの中で、もう一度平和

というものを見つめていきたいということ、この中平先生は展示館を修学旅行のコースの中に入れてたということなんです。

そこで、こういう形で十三人の方々の話を聞いていく中で、この船の資料の調達した寺地さんの奥さんの光代さんという方がこう言つたんですね。後世に原水爆のこわさを伝えるということで、第五福竜丸の保存は大きな意義があります。その意味で、船として大往生であつたと。そして、非常に数奇な運命を背負って生まれてきた第五福竜丸ですけど、その存在は非常に意味ある存在であり、そして、現在ああいう形で展示館で保存されているということを、大往生であつたということを言うわけです。

それから、被爆者の写真をとっておられる森下一徹さんが、普通は自然にあるのが平和であるのだけれど、今は平和を勝ちとらなければならぬ変な狂い方をしている世の中であるというようにことを言っておられました。たしかに、平和というものは自然にあるものでないといけないのに、今は平和を作り出すためにみんな力で

合わせないといけない世の中であるわけです。

南藤さんら八人の船大工さんがこの六月十二日に、三十六年ぶりに和歌山から、この第五福竜丸の展示館に船を見にきたんです。三十六年ぶりの船との再会であつたわけなんです。そこで話を聞きますと、もう六〇才を過ぎたおじいちゃんたちがみんな涙を流したというんですね。それは、決して自分が作った船と再会したからということと違つて、この自分が作った船が平和というものを考える上で、ひとつのポイントとしてみなさんの中で考えてもらえる船になつたというそういう喜びでもって、この八人の大工さんたちは感激したということなんです。その意味でも、

この寺地さんがいいました、この船は大往生であつたという意味がわかるような気がするんです。

第二回久保山忌句会

世界の核廃絶の声に、小さな俳句で大きな連帯を

日時 一九八三年九月二十三日
日(祭日) 午前十時
場所 第五福竜丸展示館に集
合
句会 江東区文化センター研
修室 午後一時
会費 五百円
なお、投句を観迎。二句五百円・九月十五日までに必着のこと。
送先 〒170豊島区池袋本町一
一五一一九
徳富いさを 宛

主催 第三回久保山忌句
会実行委員会

△協賛▽ 第五福竜丸
平和協会・新俳句人連
盟・原爆忌東京俳句大
会実行委員会

沈めてよいか第五福竜丸
武藤宏一氏遺稿・追悼集

発行・武藤宏一氏追悼文集編集
委員会

9ポ一段組二五〇頁/上製
頒価・一六〇〇円(送料共)
・申し込みは、第五福竜丸展示
館気付編集委員会

ンしてもらって上でいったというこ
とを証言してくれました。

一日八升のお酒

そう意味でこの船には非常にお
金というものが、かかかってきて
いるわけなんです。その船大工さ
んが飲む酒の量というのが、この
船に限ってすごかったんです。そ
れはどういうことからわかるかと
いいますと、だいたいこの船は八
人で作っているんですが、一人が
一晩で一升飲むわけです。毎晩飲
むんです。

そのお金もけっきょく船を注文
した船主、事代漁業の寺本正市さ
んが全部支払っているわけなん
です。寺本さんは神奈川県に住ん
でいたんです、その人の四男坊の
寺本四郎さんが古座町に泊り込み
で船の監督に来ていたんです。そ
の寺本四郎さんが泊まっていた神
保館という旅館は現在でも現存し
ていますが、神保館を根拠にし
て、その船が出来るまで、ずう
っと監視をしていたわけです。進
水の宴もこの神保館でしているわ
けなんです。

当時のお酒はご年配の方はご存
知のことと思うんですが、金魚酒

といわれる酒なんです。だから毎
晩一升というのがいけたんだらう
と思うんですね。金魚酒というの
は、お酒の中に金魚をほうりこん
でも死なないんです。ということ
は、それだけアルコール分が少な
かったんですね。当時は、ですか
ら毎晩一升やっても、やっていけ
たと思うんです。

それでも、そういうお酒であっ
ても毎晩では続きません。寺本四
郎さんはその酒代を作るために、
どうしたのかといいますと、寺本
さんは古座町に運搬船を一隻持っ
ていたんです。この運搬船を寺本
四郎さんは、お父さんに内緒で売
ってしまっただけです。この運搬船
のトン数は六〇トンです。当時の
金額は一トンがだいたい一万円
ですから、この運搬船は六〇万円
で売れたんです。この六〇万円のお
金全部を酒代につき込んでしまっ
たわけです。第七事代丸の建造費
が当時のお金で一〇〇万円です。か
ら、一〇〇万円の船を作るのに六
〇万円の酒代を使ってしまったと
いうことになるんです。

では、どうして寺本四郎さんは
そこまでしたかといいますと、結
極早くいい船を作って漁に行っ

もうけたかったからです。その
ためには、出来るだけ作る時間を
短縮して、かいいいものを作って
ほしかったということなんです。
船大工さんは、毎日一升ですね、
どうしてこれだけのものを飲んだ
かといいますと、すぐこの仕事
がハードなんです。このハード
の仕事から自分の肉体や精神を解
放するためには、お酒しかなかつ
たんです。お酒を飲んでとこと
ん熟睡することによって、翌日の
仕事に充分にできたんです。翌日
の仕事をするためには、この一升の
お酒は絶対不可欠だったわけです。

それと、この船を作った船大工
さんに二つ組が出来たんです。船
を中心に面舵(右側)と取り舵
(左側)の二つの組に分けて仕事
をしたんです。そうしないと、仕
事が進まない。ということは一
組と二組を競争させるわけなん
です。競争の中で、早く仕事を進め
ようとの魂胆があったんですね。

カツオ漁で日本一

そして、この船が進水しました。
一九四七年三月というのは、この
船を設計した南藤さんにとって、
思い出深い月なんです。その思い

出深い日というのが、二日あるん
です。一日が三月三日、そして十
七日後の三月二十日。三月二十日
というのが、第七事代丸が進水し
た日で、三月三日というのは結婚
した日ということで、明確に覚え
ているんですね。この船にたいへ
ん執着があるというのもこの辺に
あると思うんです。

そして、一九五四年に第五福竜
丸は被災するんですけど、南藤さ
んは被災した時は全然知らなかつ
たというんです。どうして、自分
の作った船を知らなかったかとい
いますと、船名が変わっていたか
らです。第七事代丸が一九五三年
に第五福竜丸という名に変わった
わけですが、六年間です。この
六年という歳月が果して、短か
いのか、長いのかといいますと、
普通はだいたい木造船といいま
す、ひとつの船名を受けて約十年、
それから次の船名を受けて約十年、
そして廃船になるんです。です
から、木造船の寿命はだいたい二
十年位というのが相場なんです。

この場合は、寿命が六年間しか
なかったわけですけど、六年間の
内に四年間、第七事代丸は日本一
だったんです。カツオ漁で日本一、

これを四年間続けたわけなんです
ですから、当時第七事代丸は日本
全国にその名がどろいた船だっ
たんです。その後、カツオの一
本釣りをする出っぱりが改造され
てしまっただけでなくなりました
わけですが、南藤さんはそれを見
て、非常に船の姿がみにくくなっ
たと、美しい姿がみにくくなっ
たといっていました。

このように、第七事代丸の出発
は、華やかな業績の中での出発だ
ったわけです。それから船名が変
わっていくわけですけど、これは
船を持っている方からいいますと、
売るとい言葉は使わないんです。
嫁らすといんです。ですから、
第七事代丸を嫁らして、第五福竜
丸になったわけです。

この船の幸先は非常に良かった
わけですがその背景は何かとい
いますと、この船の資材に大漁をさ
せるだけのものがあつたというわ
けです。どういうことかといいま
すと、この船は三重県の七里御浜
という所と、鶴殿という所の材料
を中心に使っているんです。この
鶴殿の東正寺というお寺に一本の
松の木がありまして、それを切っ
て竜骨に使ったというんです。寺

の木を使ったから、大漁になった
というんです。

船を作る場合、こういうことも
言うんです。首をつつた木、首
つりの松を探し、それを切つて竜
骨に使うんです。首をつつた木、魚
をつるにつながらんです。です
から、この第七事代丸を作る時
も、こういう木を探したというん
です。もうひとつ、木でいいのは、果
作っている木——果を作るとい
うのは、安心感をもっているわけ
なんです。その木で船を作ると非
常にいいということ、これらの木
を重点的に探したみたいです。た
ぶんこういうことがあつたから、
四年間、日本一の大漁が続いた
であろうといわれています。

七里御浜の松

一九六七年に第五福竜丸は廃船
処分になって、保存運動が起つて
いくわけですけど、その保存運動
の中で、島田徹之助老人の功績を
追ってみました。島田老人の話で
は、自分としては、上段に構えた
ような意味でこの船を守つたのと
は違う、いわゆる日常の生活の中
で自分は今どういふことが出来る
のかという、自分が今住んでいる

という、それを原点にして、この
船を守ってきたということ、島田
さんです。島田さんは五年間、船が
沈みかけていた時、水をかい出し
にでかけた。ただし、五年間の内
一カ月だけ休んだ時がある、それ
は病気を入院した時で、そこ
ろがその入院している一カ月の病
院生活でも寝言で船はどうだつた
かということ、さかんに言った
というんです。それにやきもち
をやって奥さんが「私と船と、ど
ちの方がかわいんですか」と聞
いたらいいんです。そうしたら島
田さんは「俺は今のところは、船
の方やなあ」と言つたと、笑つて
おられました。それだけ船を
守るといふことに対して懸命にな
つておられたということなんです
ね。

その島田さんから、発電機のプ
レートを送ってもらつた人がいる
んです。その人が寺地さんとい
う方なんです。この方は当時、古
座造船所の資材課長で、材料を集
める係をしていたんですが、だ
いたい船というものはいるんな所
で資材を調達するわけなんです。
この船に限って、三重県の七里御
浜の松の木が大半をしめていたと

いうんです。先程いきました、果
を作つた木など船の材料にするに
ふさわしい木がここにたくさんあ
つたというわけです。現在でもた
くさんの松が植わっています。そ
して浜は、那智黒といまして碁
石のもとになる石がたくさん
がっているんです。それを拾う老
婆の姿が点々と見える浜なんです
が、この七里御浜の松の木を使
つて第五福竜丸が作られたわけ
です。この七里御浜なんです。船が
作られた古座町から車で約四〇
五〇分の所なんです。そして、こ
こで切つた松の材料を筏に組んで、
六時間位かけて、古座まで運ん
できて作つたわけです。そして、そ
の後第五福竜丸は廃船処分とな
つて捨てられるわけですけど、その
時業者はエンジンだけ、これは二
二〇馬力ですが、ディーゼル・エ
ンジンだけをとりまして、違う船
に積んだんです。その船の名が
第三千代丸です。この船の処女
航海で、神戸の方に荷物を運ぶ時
に、この沖で時化に合うんです。
そして、沈没を免れるために、こ
の七里御浜に乗り上げています。
その乗り上げた日が、一九六
八年七月二日。ここは波がきつ